

# 日本棋院鶴丸敬一 7段対苧坂達文アマ 4段観戦記 (5子局)

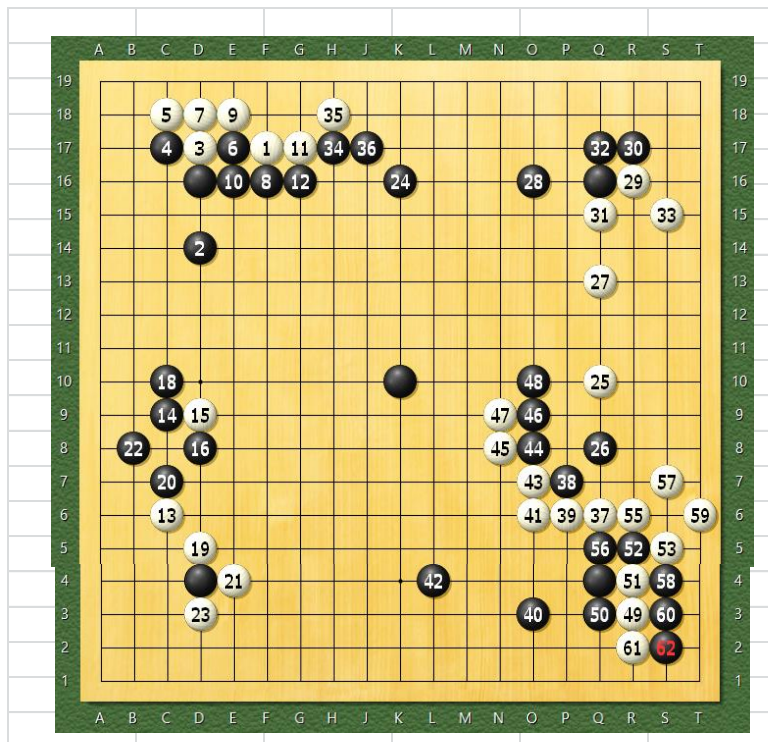
中野俊一郎

場所は新宿「囲碁サロン秀策」、国土 OB 会囲碁の定例会が行われているところである。今回は鶴丸敬一7段を迎え棋聖戦の解説から始まる。細かいところの手順より大所高所からのニュアンスを解説してくれるところがいい。考え方の解説はご自身の心の中が吐露されてプロフェッショナルの思考経路が少しかけ垣間見えたようで心地よい雰囲気だ。

指導対局が始まる。

苧坂氏は厚く打てば必ず勝てると思っている進行である。確かにそうであろう。プロとはいえ、苧坂氏に5子置かせては大変であろう。

ここでプロのプライドがある。手のないところに手をつけるとかだまし(相手に錯覚を期待するような手を打つ)など禁じ手だ。という、この考え方は鶴丸7段には強く感じた。決して手のないところには打たない印象を最初の数十手で見て取れる。しかし、囲碁とは錯覚・読み違いを楽しむゲームのはず。これは一種アマを甘やかしているのではないか。趙治勳は1分碁・1番手直りでプロの若手相手に5~6子まで打ち込むという。泣きながら若手は打っているという。この世界こそ、、、と思うのだが。

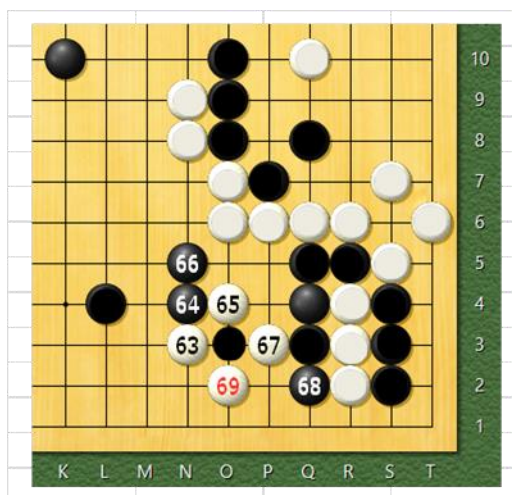


さて対局内容であるが、白1と左上の小ゲイマガカリで始まった。

## 【第1譜】(白1~黒62)

黒は62までで固く打ち、右下隅に20目余の地を確保したつもりでいたようだ。

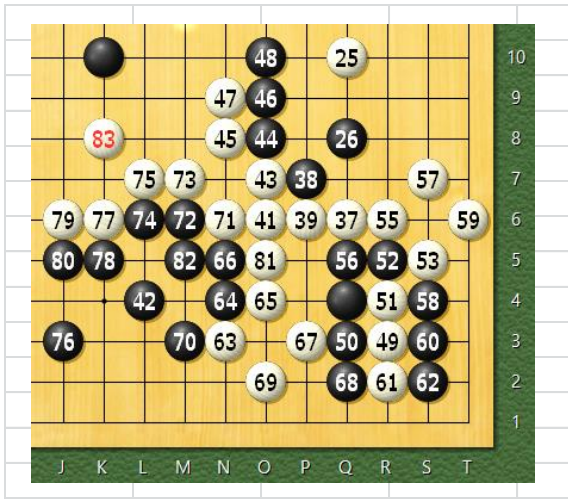
黒54 (S6)



## 【第2譜】(白63~白69)

白63から白69まで下辺と右下隅をコウ付だが分断され、黒はハツとしたようだ。星の置石と黒64、66の3子が大きく呑み込まれては、下辺に白の膨大な地が出来てしまい、一気に敗色濃厚となる。

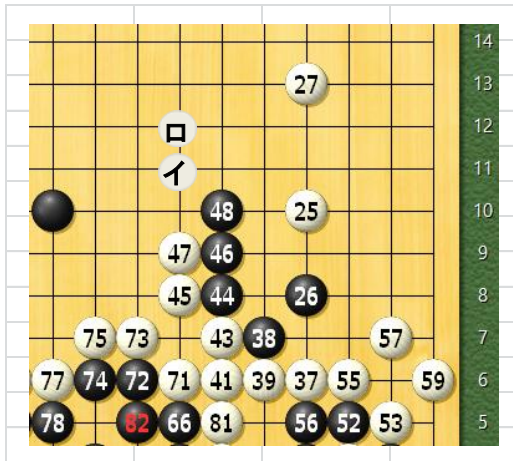
黒は気を取り直し、無理な戦いを避け、左右を別々に生きる方針で打ち続けた。



【第3譜】(黒 70～白 83)

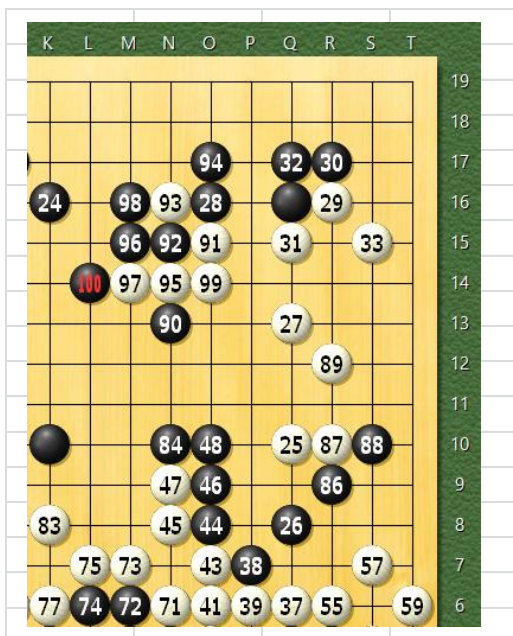
黒は70と押さえ白71とN7の断点補強に対し黒72のハネから黒82まで素早くイキを確保した。次にプロは白83と断点を補強した。これを黒が白に対し1手かけさせたとみるのであれば、黒は白81のところに出て下辺の4子を取りに行き、白が黒82のところへ打って両アタリとなり2子を取らせても腹は立つまい。よしんば切り離れた白を生かしたとしても右下隅との連絡は確保されている。

実戦では黒は白83に黒84と打って上辺から左辺の大模様との連絡を目ざした。黒にとってはまさに「黄金の曲がり」であり勝利を確信する一着であろう。しかし筆者の見解は白83は黒84をわざと打たせるためであり、その結果、右側の黒数子を重くさせて中原の黒模様を牽制していると見た。



【参考】

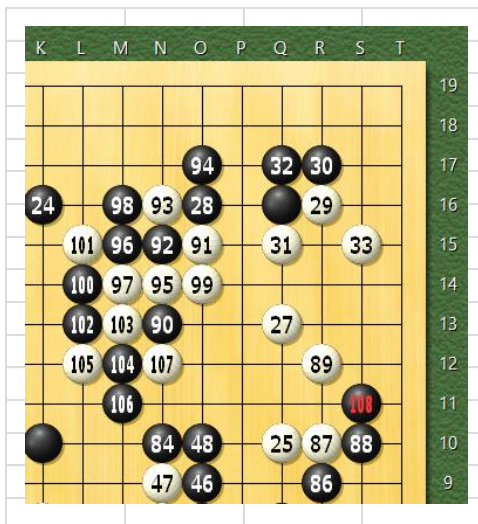
プロは、白83では白イや白ロなど打ちたかったにちがいない。ただし、右側の黒数子は下手をすれば簡単に放棄されてしまい、それによって黒の中原がまとまると共に、碁が簡略化することへの対策でこうしたのであろう。



【第4譜】(黒 84～黒 100)

黒86、黒88ではO13やN13あたりに早めに打ちたいが、黒の構想は別のところにある。この時点で黒はまだ30目以上リードしている。この後、黒は少し安全を踏む手順が出てしまう。黒94はまさに弱気が出た。(N14のツギか)黒98はO14(白99のところ)に切る一手であろう。白99に手を戻されては中原の黒模様が消え、右辺からの黒の一团も心細い。ここで黒は100から打った。すべて読み切りか、個性あふれる構想だと思う。





【第5譜】(白 101～黒 108)

蛇足ながら、黒 108 は中央 K12 で一子を捕獲していれば問題なかった。黒は中央の守りと次に下辺の白4子取りだけ考えていれば完勝するのだ、と思う、この時点では。

冷静であればそうではないことは誰にでもわかることだが、対局者はそうはいかない。

実は黒はこの後、S13 への飛び込みや O12 を睨んで秘かに白の大石を狙っていたようだが。

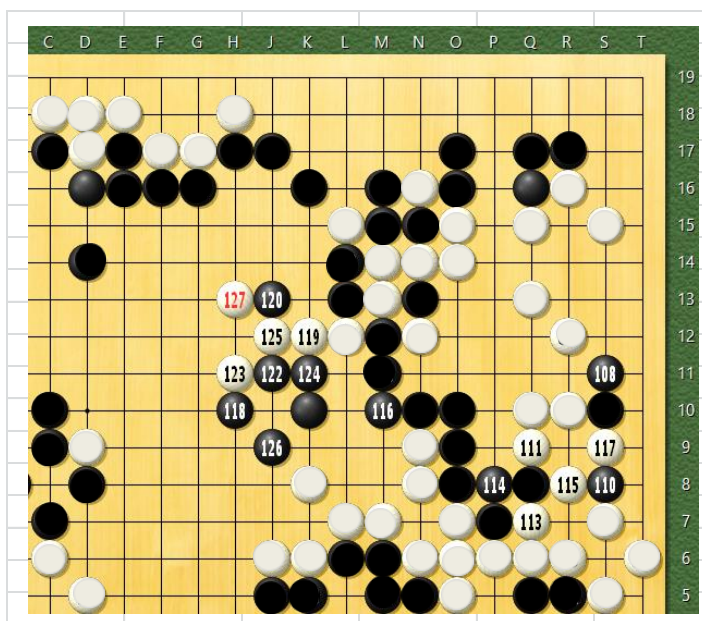
【第6譜】(白 109～白 127)

白 121 の割り込み。(J10 のところ) 参考になる手筋である。苧坂氏は強く黒 122 とアテる。白 123 と切り、白はいろいろな利き筋を見せ強いと言っている。しかし、難しくなってきた。

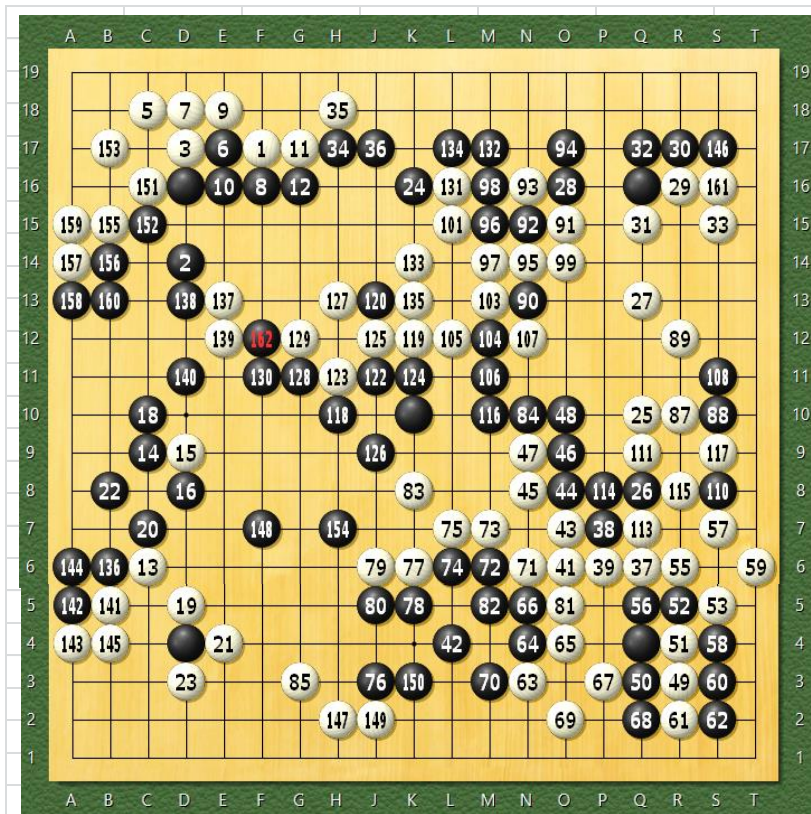
白 127 と味よくかけつぎ、要の黒 2 子が落ちる形になってしまった。そして要の 2 子は抜かれてしまった、、、。

苧坂氏は見落としていたのであろう。

黒は、動揺の中、ここからの一連の手順で中原を荒らされ、下辺 4 子に生還され、すでに足りなくなっているように見える。



白 109 (R8)、黒 110 (S8)、黒 112 (R7)、白 121 (J10)

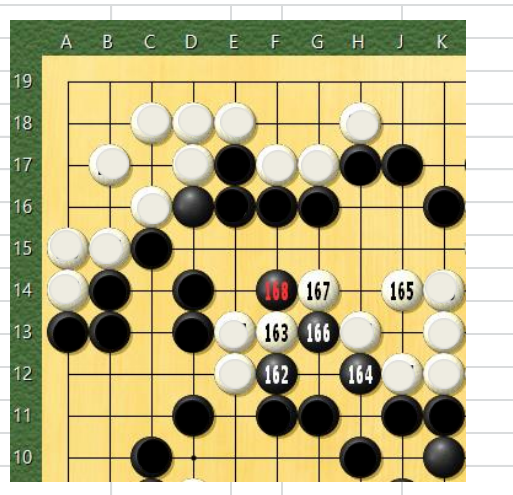


【第7譜】(黒 128～黒 162)

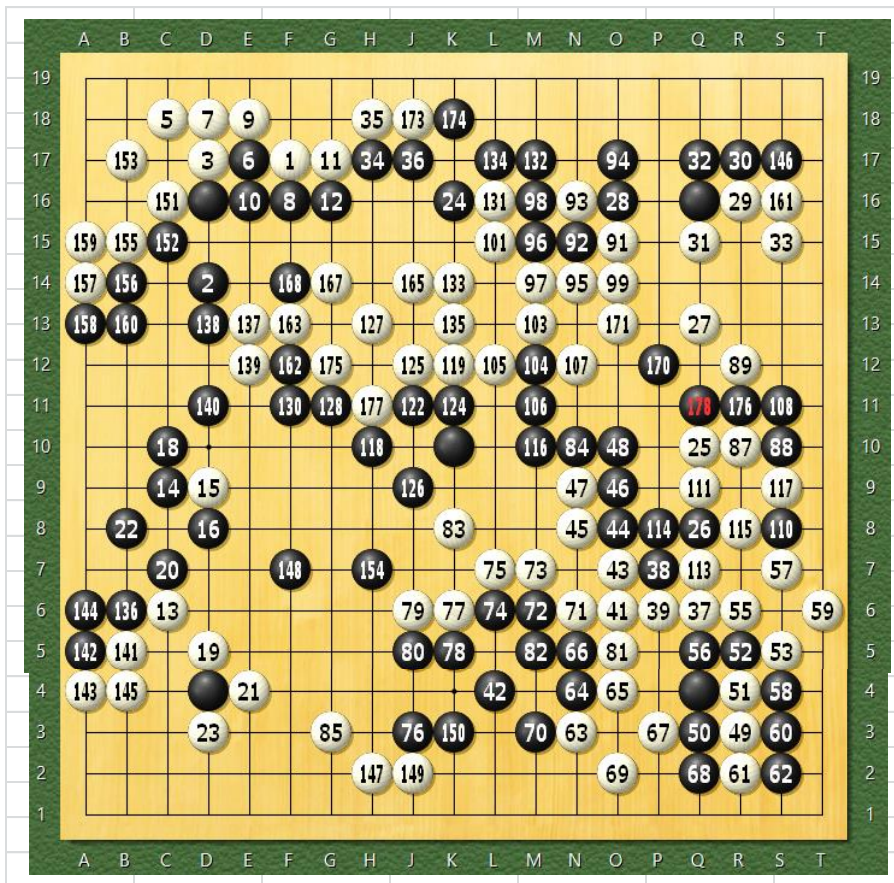
ここで黒は 162 の出から下図黒 168 と切ってコウを挑む。

突然の強襲である。

プロはコウを受けて立つが、これは黒の花見コウである。細かくなった。







【最終譜】(白 163～黒 178)  
黒中押し勝ち

黒 166 (G13)、白 169 (G12)  
黒 172 (G13)

黒 170 のコウ立てが絶妙。この時、黒は右辺の黒 88、黒 108 の 2 子生還のコウ材を読み切っていたのだ。黒 176。妙手一閃である。対局後の感想戦ではプロも錯覚していたと言う。白は白 175、白 177 とコウを解消したが黒 178 の出を見て投了。苧坂氏は、最後に強靱な足腰の踏ん張りで勝ちを呼び込み、鶴丸 7 段より 5 段のお墨付きをもらった。栄誉あることである。世の中で劣勢だったアマがプロを最後にねじ伏せることなど滅多に起こることではないことは囲碁の愛好者は周知のことと思う。それをやってのけた苧坂氏は、まさに奇跡を起こしたのだ。

とは言え右辺の黒の生還で鶴丸 7 段は投了したが、細かいながら白が残ったか、と私は見ていた。あとで、私はそのことを鶴丸 7 段に確認したが、鶴丸 7 段はしばらく頭の中で棋譜を検討しながら「やはり白は足りませんね。」と答えた。この後、正しく寄せることなどアマチュアにはできはしない、その通りであろう。納得しながら有志で鶴丸 7 段を囲んでの宴席に向かう。外は 2 月はじめの冷たい風が吹いていたが、苧坂氏の頬は紅潮しほころんでいた。

<注記>  
ここに書いた囲碁の内容についての感想や所見は、私個人の印象をそのまま書いたもので、間違いだらけかもしれないが、低段のものの勝手読みとしてご容赦願いたい。

—— 平身低頭 ——